アジア研究センター共同研究

アジア都市の生活圏

レクチャーシリーズ

2

Kanagawa University Center for Asian Studies

本レクチャーシリーズは、アジア研究センター共同研究「アジア都市の生活圏」に基づくものである。コロナ・パンデミックは私たちの生活、そして都市の変容を促したが、身近な生活圏に目が向けられるようになったことも大きな影響といえる。買い物や通勤・通学などの生活利便性だけでなく、自然豊かな遊歩道や公園、サードプレイス（居場所）など、生活を豊かにする環境が求められるようになった。一方、アジアのいくつかの都市では、公共交通や自動車ではなく自転車やバイクによる移動により、欧米や韓国、日本のそれらとは異なる生活圏を構成しているように見える。そして、そのあり様がアジア固有の景観を形成しており、アジア都市に即した生活圏へのアプローチが求められる。

レクチャーシリーズは、本共同研究の先行研究と位置付けられる「アジアの社会遺産と地域再生手法」（2018-22）の一環として、2020年後半からスタートさせたものである。コロナパンデミックにあって、アジア各都市を対象としたフィールドワークを手法とする私たちの研究は方向転換を余儀なくされた。一方で、オンライン授業などで導入したオンラインミーティングシステムは、普段なかなか会えない海外研究者たちとの距離を縮めてくれる利点をもたらした。そこで、2020年度後半から2022年度にかけて、アジアの都市・地域をフィールドにもつ研究者・実践者に登壇いただく連続レクチャー（公開講演会）を企画・開催することとした。リアルな場からデスクトップ越しのフィールドワークへの転換であった。

その後、私たちはフィールドワークを再開させたが、デスクトップ越しのフィールドワークは研究の視点を広げる有効な手法であり、アーカイブとして外部から評価もいただいた。ここに収録された連続レクチャーの記録を通じて、アジア都市の生活圏、ひいてはアジア的地域計画論について議論を深めるきっかけになれば幸いである。

神奈川大学建築学部建築学科教授
神奈川大学アジア研究センター所員
共同研究「アジア都市の生活圏」代表
山家京子

©大木宏之

アジア研究センター共同研究

「アジア都市の生活圏」レクチャーシリーズ

Vol.2

ハノイ都市部の生活圏

竹森紘臣

（Worklounge 03- Vietnam 代表取締役）

INTRODUCTION

山家京子（神奈川大学建築学部教授）

山家　本日ご登壇いただく竹森紘臣さんは、みかんぐみ勤務などを経て、2003年から東京でWorklounge 03-を共同主宰、2011年からベトナムに居を移されて、Worklounge 03- Vietnamを設立されています。ハノイを拠点に、ベトナム、日本、その他アジアの国々のプロジェクトに携わっていらっしゃいます。

Worklounge 03- Vietnamのウェブサイトを見せていただきましたが、ミッションとして「人と地域と地球に優しくて美しいかたち」を掲げられています。今日は大変興味深いお話が伺えるのではないかと、楽しみにしています。それでは竹森さん、どうぞよろしくお願いいたします。

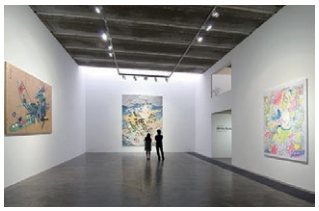
竹森　よろしくお願いします。皆さま、初めまして。竹森紘臣と申します。ご紹介いただいたように、ハノイで設計事務所をやっています。Worklounge 03-という会社を、日本にいるときから続けてやっています。今日は「アジア都市の生活圏」のレクチャーということで、私が住んでいるハノイの都市部の生活圏についてお話をしたいと思います。副題として、「ソトでの暮らしと所有の概念」ということを中心に、最後にまとめてお話しできればと思います。

Worklounge 03-は、設計者である私の他にもう一人、サステナブルデザイナーのティム・ミドルトンと一緒に、ハノイを拠点に、アーキテクチャーデザインとサステナブルデザインの両輪でやっています。先ほどご紹介いただいたとおり、関西大学、大学院在学中は大阪に住み、東京でみかんぐみに勤めた後、独立し、その後ハノイに行くことになり、今もハノイを主な拠点としています。

日本では、2003年に自分の事務所をつくって、名古屋で住宅を設計したり［図1］、そのときには中国の北京でも仕事をしたりしていて、ミヅマアートギャラリーというアートギャラリーのデザインをしていました［図2］。これは東京のミヅマアートギャラリーのデザインです［図3］。

それで、2011年に渡越することになります。きっかけは、知人がベトナムで仕事があるので、ちょっと手伝ってくださいという感じで行ったのですが、ベトナムの建築に、アジアの文脈で建てられているような雰囲気を感じて、まだそれが何かというのは、そのときは全然分からなかったのですが、とにかく魅力を感じました。そういいますのも、先ほど紹介したミヅマアートギャラリーの仕事では、日本やアジアの美術を文脈としたアートを扱っていたので、その影響もあって、ベトナムの建築がどういうものか、どのように今のかたちになっていったのか知りたくなり、ハノイに住み始めました。

［図1］ ©山田新治郎



［図2］

［図3］ ©FOTOTECA

LECTURER

竹森紘臣
（Worklounge 03- Vietnam 代表取締役）

1977年静岡県生まれ。関西大学大学院修了後、みかんぐみなどを経て、2002 年に東京にてWorklounge 03-を共同主宰。2011年に渡越後、Worklounge 03-Vietnamを設立。ハノイを拠点に、ベトナム、日本、その他アジアの国々のプロジェクトに携わっている。

LECTURE

渡越した2011年当時のハノイ

ここから少し、ハノイについて簡単に紹介します。私がハノイに行った2011年頃は、まだハノイ市内に計画停電がありました。あと、お店は大体20時頃に閉まります。料理屋さんも22時には閉めないと、警察が来て、閉めなさいと言われます。コンビニはありません。エアコンのない家、シャワーも水だけで、お湯が出ないところも多かったです。現在の2025年は、この辺りがずいぶん違います。

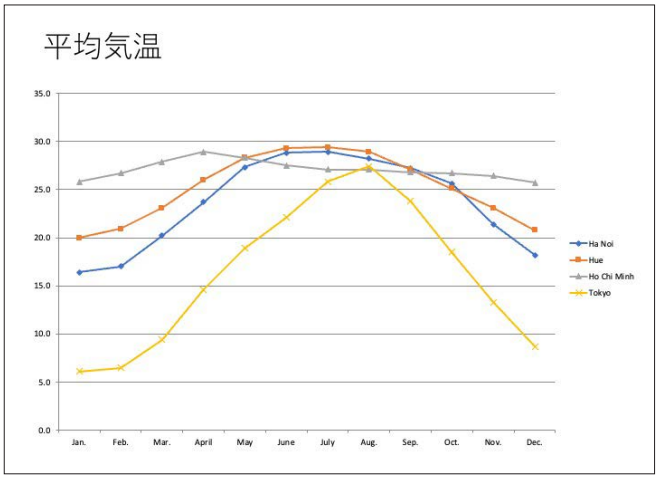
そのような2011年から、ベトナムってどんなところだろうということを考えて、自分の設計をするためにベトナム建築のことをいろいろ調べて、実際に訪れて記録したことをまとめたものを本にして一昨年出版させていただきました。『ベトナム建築行脚」という本です[図4]。この本は、自分の設計の趣意書の、長い前段みたいなものにしようと思って書きました。

[図4]

ベトナムの歴史と風土

ベトナムは南北に長い国で、ハノイがあるのは北部のほうで、南部のほうは元々クメール族が住んでいたり、中部のほうはチャンパー族が住んでいたり、全く違う文化を持つ国でした。それで、ベトナム戦争や第二次世界大戦を経て独立していくのですが、昔は中国の影響を受け、途中からフランスの影響を受けて、最終的には共産圏としてソ連の影響を受けながら、ドイモイ政策といういわゆる経済開放で、1980年代以降は資本主義の影響をどんどん受けるようになりました。このように、フェーズが変わるたびに文化の入れ替わりがあったのですが、北部は特にそれが激しいところです。

気候は、この黄色い線が東京の平均気温ですが、ハノイはこの青い線です[図5]。ベトナムと聞くと、常夏のイメージがあると思うのですが、ハノイには一応、冬もあって、今の時期にハノイに行くと、結構寒くて驚かれる方も多いです。ただ、日本の冬と違うのは、冬でもすごく湿気が多く、60~70%の湿度があるので、その辺りは建築にも影響してきます。夏はゲリラ豪雨のような大雨が降るので、すぐ道路が冠水してしまうような場所です[図6]。



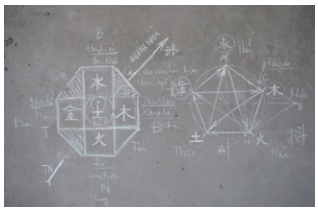
[図5]

[図6]

都市部は先ほどの道路が冠水していた写真のようなところですが、ハノイに限らず、ベトナム全土のほとんどは農村です。今でも郊外に行くと、ノンラーというすげがさをかぶった人が手作業をしている風景が、ずっと続いているような国です[図7]。

建築では、風水がすごく信じられていて、現場に行くと、風水の羅針盤の絵が描かれていることがあります[図8]。

[図7]



[図8]

これは北部の農村の伝統住宅で[図9]、北部の土の色がそのまま表れている赤色の瓦屋根です。昔は木造で造っていましたが[図10]、今ではだんだんその伝統が消えてしまいつつあります。小さい

ですが、デザイン的にもかわいらしい瓦です［図11］。ただ、今のハノイ市内では、建物の屋根が、例えばトタンのような近代的な材料にどんどん置き換わっているのですが、色はまだ赤が人気で、これがハノイのカラーになっています。この写真で見ても分かるように、ほとんどの家が赤い屋根をそのまま残しています［図12］。

ベトナムには中国系やクメール系など、54の少数民族がいて、その多くが山岳地帯に住んでいます。少しハノイから離れると、山岳地帯には、こういう棚田の風景が広がっています［図13］。

以上が、ベトナムやハノイの簡単な説明になります。

［図9］

［図10］

［図11］

［図12］

［図13］

ハノイの旧市街

ハノイのまちは、ハノイ市と呼ばれる地域が今、ものすごく合併が続いて、大きくなっているのですが、ハノイの都市部というと、旧市街や、後ほどお話しするNgoと呼ばれる路地空間と団地ですね。居住エリアとしては、そのような地域が多いです。

ハノイの旧市街は、元々、36通りと呼ばれる職業別の通りがあり、皇帝御用達の職人街として1,000年ほど前につくられたまちで、今でもハノイの中心部に残っています［図14］。今でも職人街の要素も残しながら、ほとんど観光化されているところもあります。

［図14］

ハノイの地図はあまり残っていなくて、1470年頃にやっとこういう地図が出てくるのですが、この真ん中にお城があります［図15］。スケールも合っていないので分かりにくいですが、この地図を見る限り、今の姿とは全く違っています。次に、時代が飛んで、1873年頃につくられたハノイの地図です［図16］。西湖と書いてあるところがWest Lakeで、そのすぐ下にあるのがお城で、右側の赤い部分が旧市街です。すごく高密度で、旧市街自体は約82ヘクタールあるのですが、そこに8万人が住んでいます。ですから、1ヘクタールあたり1,000人が住んでいることになります。日本でいうと、高島平の団地の密度ですが、ただしここは建物が全部2〜3階建てで、その中に1ヘクタールあたり1,000人がひしめくように住んでいます。旧市街の道を歩くとこのような風景が見られます［図17］。ここはHang Dong通りといって、Dongは銅という意味ですが、元々は銅細工の職人さんが1階で工房を開いていた通りです。今でも銅細工は売られていますが、工房はなく、どこかから買ってきて売っています。最近は、そのお店も閉じて、カフェになったり、少しずつ変わってきています。こういう銅通りであるとか、これはHang Thiec通りといって、Hang Thiecはブリキ細工という意味ですが、今はステンレス加工などを行っている通りがあります［図18］。

［図15］

［図16］

［図17］ ©大木宏之

［図18］

元々、ギルド※1のようなかたちで、通りごとに職人街が形成されていたので、今でもこの行政区域は、ブロックではなく、通りごとに分かれていて、以前の跡を少しずつ残しています。これが先ほどの1873年の地図を拡大した、旧市街の部分です［図19］。今からおよそ150年前までは、旧市街の中にたくさん池があり、ベトナムでは池のことを湖と呼ぶのですが、この地図の下のほうを見ても、ほとんど池ばかりです。漢字で「河の内」と書いて「ハノイ」というのですが、まさに昔は河の内側にあるようなまちでした。それで、右側にあるソンホンという大きな河とつながって、いろいろなところと交易をしてきたという流れがあり、旧市街の中にもこういう大きな池が幾つかありました。これはちょうどフランスが占領し始めた頃の地図なので、ここからフランスによってガラッと施策が変わっていきます。

※1 商工業者の間で結成された職業別の組合。

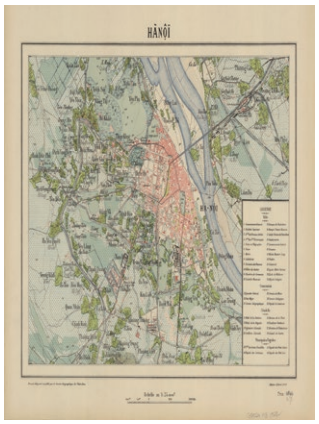
［図19］

フランスによってつくられた旧市街の建築

1885年頃になると、もうすでにほとんど池はなくなってしまって、ここからだんだん旧市街の高密度化が始まっていきます［図20］。フランスが来たときに、こういった土地改革を行ったり、旧市街周りのインフラを整備しました。これはLong Bien Bridgeという鉄骨トラス構造の橋ですが、当時、アジアで一番長いと言われた鉄道の橋です［図21］。それから、今はもう使われていませんが、衛生のための給水塔を、旧市街の周りにつくりました［図22］。宗教との関わりでいうと、文化を広めるための教会もつくられました［図23］。ベトナムはクリスチャンの方が結構多くて、人口の10%程度がクリスチャンなので、彼らが使えるようにつくったそうです。こういったインフラや宗教施設をつくった後には、これはオペラハウスですが［図24］、文化施設を旧市街の周りにつくっていきました。

これはエブラールという建築家がフランスから来たときに、インドシナ様式という建築様式をつくろうと頑張ってデザインした国立歴史博物館です［図25］。例えば斗栱（ときょう）※2とか、八角形のモチーフとか、ビジュアル的なところにとどまってしまったので、この後にこの様式を受け継いでつくる建築家はあまり現れなくて、結局、彼の作品だけがハノイに幾つか残っているだけになってしまったのですが、今でもこれは国立博物館として使われています。

※2 柱の上部や軸部に設置された、屋根や軒などの荷重を支える構造部材。



［図20］

［図21］

［図22］

［図23］

［図24］

［図25］

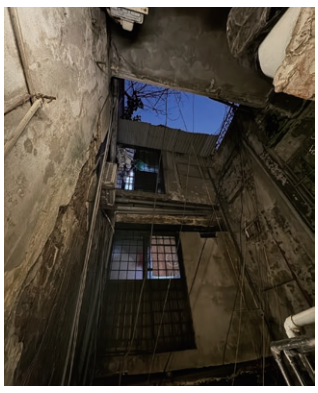
密度の高い旧市街

旧市街は、上から見るとこのように、本当に密度の高いエリアだということがよく分かると思います[図26]。実際、先ほどの地図で池があったようなところは、このような感じになっています[図27]。少しノイズのように入っている黒い点が、空いているところ、空地で、あとは全部、何らかの建物が建っている状況です。道路からブロックの中心までは、およそ80メートルあります。この中に何人もの人たちが住んでいるのですね。元々はこの半分くらい、40メートル程度の、中庭のある町家が多かったのです。これは、真ん中の池を埋め立てて、どんどん建物を建てようというフランスの政策と、ベトナムが独立した際に、たくさんの人を都市部に呼んで、住まわせたことに起因しています。恩賞として、この土地をどんどん配っていって、いろいろな方がこの中に住み始めて、密度がどんどん増していったと言われています。複合的な理由によって、この旧市街の中がとにかく高密度になっていきました。これがちょうと先ほどの街区の真ん中辺りです[図28]。空隙（くうげき）といっても、これくらいの空が見えるだけで、あとはこういった壁に囲まれています。

2000年の最初に、小嶋一浩先生がハノイモデルを研究されたときに、こういう調査をして、この密度を保ったまま、どういうふうにここで建築を建てるかというモデルをつくりました。そのモデルが、ハノイの建設大学にあったのですが、それもつい先日、取り壊されてしまいました。ただ、この中の状況は、そのときとあまり変わっていないようです。

［図26］

［図27］


［図28］

路上における生活のアクティビティ

このように、街区の中の密度がどんどん増していって、この中で寝起きはできるけれど、生活のアクティビティはなかなか難しいということなのか、生活のアクティビティは路上のほうにどんどん向かっていきます。これは、もちろん高密度だけが原因ではなく、そもそも高温多湿な気候なので、外の日陰の空間を好むという理由もあります。

この写真で青い椅子が並んでいるのは、旧市街の路上ですが、皆さん、自分の家の前の歩道を、こういうふうに店先にしたりしています[図29]。実際に行った方は分かると思うのですが、ほとんど歩道の意味を成しておらず、歩くのがなかなか大変です。その横をバイクや車がビュンビュン通り過ぎていくようなところで、みんなご飯を食べているのですね。ベトナム人は、大体、外で朝食を食べる方が多いです。このように、外部や路上に多くの生活が出てきています。

旧市街では、朝になると、路上に野菜やお肉、生活食料を売りに出て[図30]、お昼ぐらいになると畳んで、いなくなっていたりします。あとは、朝早くにバイクに乗って出かけて、そのままバイクの上で買い物したりします[図31]。

とにかくいろいろなものが外に出てきます。それをこれから紹介します。例えばこれはHang Ma通りという、おもちゃ屋通りのようなところですが、イベントごとに、例えばクリスマスであればクリスマスグッズを、お正月であればお正月飾りを、道いっぱいに出して売るのですね[図32]。ここをバイクで通り抜けたり、人が歩いたりしながら、みんな路上で買い物をします。

［図29］

［図30］

［図31］

［図32］

これは先ほど紹介した、ブリキ細工の通りです[図33]。少し見えにくいですが、皆さんステンレスの加工をするときは、大体、店先の歩

道のところでやっていて、大きいものをつくるときには道路にもはみ出たりして、自分の土地と道路の境目がほとんどなくなっています。仕事でも生活でも、このように道路を使って、外の暮らしを楽しんでいるというか、余儀なくされているという見方もありますが、ハノイの気候にも合っているし、皆さん、そういう生活をしています。

生活面では、こういう娯楽、例えば中国将棋をするにしても、皆さん外で集まって、よく聞いたらあまり知らない人同士らしいのですが、こういうふうに路上でやっています[図34]。それから、鶏を戦わせる闘鶏とか、そういったものが路上にあふれ出ています[図35]。何か許可を取ってやっているかというと、全くそのようなことはないです。たまに警察官が来て、怒られることもありますが、個人でやっている分には、それほど言われません。みんな、空いているところを探して、自分の好きなように使っています。ここで暮らしている人の空間に対するコミットの仕方は、日本のように与えられるものではなく、自分たちで見つけていく感じがすごくしています。

[図33]

[図34]

[図35]

これはベトナムがサッカーの試合で勝っているときに、先ほどのHang Thiecという職人通りに、自分たちでテレビを出して、中継を見ていました[図36]。たまたま、私がその横を通ったら、お前もそのまま見ていけという感じでビールを出してくれて、座ってみんなで観戦しました。まちの中で、自分たちで工夫して、すごく楽しんでいる感じが、とても印象的でした。

こういう娯楽もあるし、料理や煮炊きも路上でしたりするのですが、これはちょっと特別で、実は今日は旧正月の1月1日で、お正月なのですね。ベトナムでは、旧正月を祝う習慣があって、この写真の右上の料理をつくるために、大きな鍋で10時間ほど、もち米を煮て、笹に包むというおせち料理があります[図37]。それも年に一度、この時期だけですが、全て路上で行われていて、近所のみんなに声を掛けて、一つの釜を使ってつくるそうです。

[図36]

[図37]

植物と共生する暮らし

旧市街に限ったことではありませんが、植物が建物の一部になっているというか、その境目が非常に難しいと思わせるものが多くあります。建物に対して、このブーゲンビリアの木も、庇（ひさし）や窓の日除けになっていたり、装飾やシンボルになっていたり、植物の使い方が非常に上手いと思います[図38]。外部空間の使い方では、植物の下にお茶屋さんをつくっている事例もあります。そういった試みを、都市部や旧市街の高密度な地域でも、積極的に行っています。植物がつくり出す心地よい空間を目ざとく見つけて、読書をしたり、自分たちで積極的にコミットして空間を見つけていくところがあります[図39]。アクティビティのほとんどが外に出ていて、外での暮らしを楽しむというのがベトナムのスタイルです。

[図38]

[図39]

ですから、設計においても、おのずと建物の中だけでなく、外の空間とどうつなげるかというところは一つのテーマになってきますが、旧市街の中で、それをどういうふうにこれから行っていくかということは一つの課題になると思います。

旧市街におけるアートギャラリーの設計

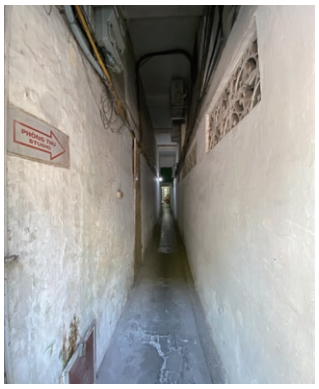
旧市街の中で、住宅ではないですが、先日、アートギャラリーを設計したので、紹介したいと思います。先ほど紹介した旧市街の下部、南のほうに位置するHang Bo通りに、このように間口4メートルほどの建物が並んでいて、これらはフランス統治時代に建てられたものです[図40]。上に書いてある文字は、フランス語で印刷という意味ですが、元々、印刷所だったところで、ここで小説などの印刷物が刷られていました。今は、2階にも3階にも人が住んでいます。1階は店舗になっていますが、左下の緑の文字が書いてあるところが、この建物の入り口です[図41]。

ここから奥に80メートルほど続いていて、入り口を見ると、初めて行くと、入るのが少し怖いと感じるかもしれないです[図42]。次の写真が、ちょうど真ん中辺りから道路側を見た様子です[図43]。幅1メートルに満たないような廊下が80メートルほど続いて、僕たちが設計した敷地はその一番奥に、ぽっかりと空いた土地があって、そこにアートギャラリーを設計することになりました。

そもそも、なぜそのようなところに土地が空いていたかというと、先ほどお話しした池があったときの名残で、ここだけ建物が建てられていなかったのです。南側には、フランス統治時代に建てられた大きな学校があって、それは旧市街の中で池を埋め立てたから建てられた、数少ない大きな建物で、それとこの家に挟まれた空隙のようなボイドが突然現れるという、ちょっと特殊なところです。

［図40］

［図41］



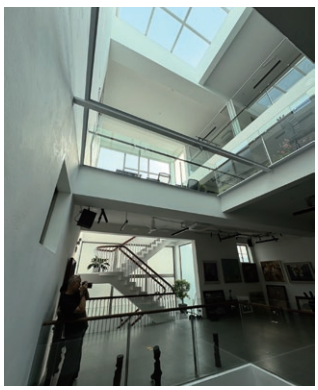
［図42］

［図43］

この写真の白い建物がギャラリーなのですが、これは前面道路から見たところで、ほとんど周りは埋め尽くされています[図44]。道路から70〜80メートルも離れた場所に、こういったアートギャラリーを設計しました。1階がアートギャラリーで、2階がワークショップスペース、3階がオフィスになっています。設計の趣旨としては、元々、ボイドだったということ自体がすごく奇跡的なことで、幅1メートルにも満たない通路を70〜80メートル歩いていくと出会うボイドというのを、何とかキープしたいと考えました。そのコンセプトに、アートギャラリーというプログラムがちょうどフィットして、とにかく1階はがらんどうの、天井高が7メートルほどあるような大きな空間をつくっています[図45]。次に、2階から上を見たところですが、こういう密集した地域なので、どうしても光を採り入れるには、ほとんど上しかないので、こういうトップライトを設けてつくっています[図46]。

［図44］

［図45］



［図46］

外装に関しては、旧市街の建物は、住民の方がそれぞれ自分たちでデコレーションしたり、少しずつ時間をかけてつくってきたりしているので、あえてそういう装飾的なものをつくらず、これからアートギャラリーの人たちが自分たちでつくっていこうということで、今はただの真っ白な箱になっています。ですから、この地域に行くと、今はこの建物だけが白く浮かび上がってきますが、今後、旧市街にどうなじんでいくかということが、このプロジェクトの楽しみにもなっています。

路地の中の住宅

次に、路地の中の住宅について紹介します。先ほどお話しした旧市街の周りの部分は、以前はほとんど畑でした。昔は農村があって、ほとんどの部分が畑だったのですが、北部の農村は生け垣に何軒かの家が囲まれて、門が付いていました。その門だけ、いまだに残っているところが、ハノイ市内に何カ所かあります。ですから、住む人が増えても、基本的には生け垣の中に入れようとするので、路地空間の中にどんどん住宅が建っていくようになりました。畑がつぶされて、それが幾つも連なっていって、現在このような、かなり密集した状況になっています[図47]。元々、農村の路地なので、幅1〜2メートルぐらいしかなくて、車が通れないような路地が、今、ハノイ中に張り巡らされているという状況です。

[図47]

このGoogleマップで、薄いグレーで表示されているのが路地ですが、実はさらに細かい路地がたくさんあって、認識されているものだけでも、これだけあるのですね[図48]。右上に団地と書いてありますが、この部分だけ空いているのは、開発される前は元々、畑だったところに団地をつくったので、そこだけ路地がなく、広い土地が残っています。他は細かい街路でびっしり埋められているような状況になっています。

[図48]

こういった街路は、幅2メートルにも満たないので、バイクだけが走れます[図49]。先ほどの旧市街と同様、生活が路上にあふれているのですが、場所によっては祭壇があります[図50]。路上にある菩提樹の木に、こういうものがつくられているのですが、住人の方が普段からお花を供えるなど、コミュニティに寄与する部分もあります。これはココナッツを売っている女性ですが、こんなふうに、物売りの方も来たり[図51]、魚が売られていたりしています[図52]。

[図49]

[図50]

[図51]

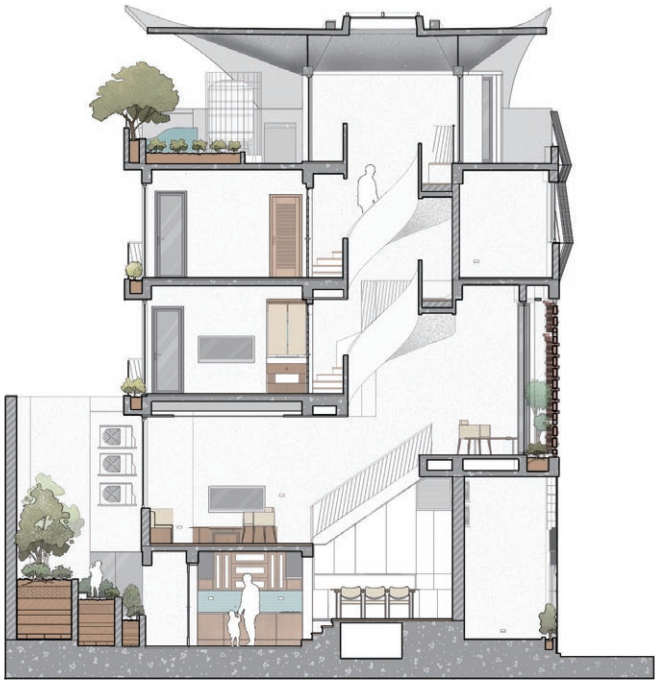
[図52]

これは私が設計した住宅の前の路地ですが、ご覧の通り、ほとんど空が見えないというか、ファサードがないような状況です[図53]。こういったところに、どういうふうに設計をしたらいいかということを考えて、住宅をつくりました。

［図53］ ©大木宏之

この建物は、真ん中に大きなボイド空間をつくって、そこにらせん階段をつくって、重力換気で上に空気を抜いています。なるべく路地に面する部分の気積を大きくして、上に熱気が行って、下にこもりにくくしています［図54］。路地は、陰が暗い分、すごくひんやりしていて、夏は気持ちいい空間だったりします。その雰囲気を住宅の中まで持ってくるというのが、設計のテーマです。それで、冬は屋上を閉じて、夏は全開にして、上から空気を抜くという設計をしています。

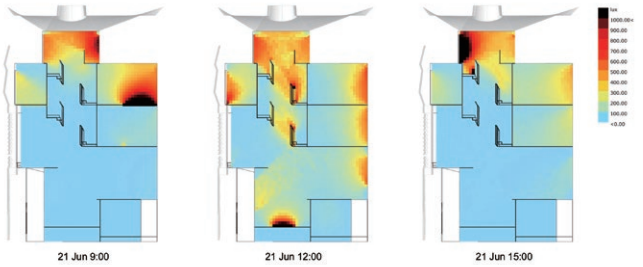
建設に関していうと、幅が狭い路地なので、みんなでこういうふうに鉄筋を大通りから担いで運んできたり、なかなか普通のところではやらないような工事方法で、工事を進めていきます［図55］。



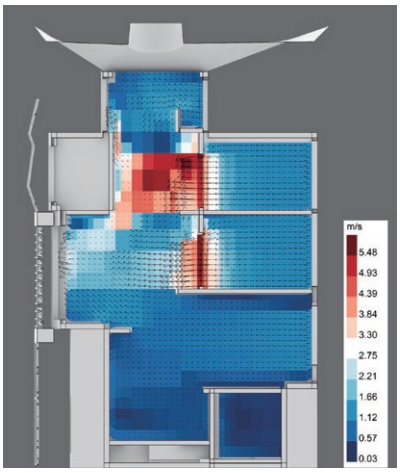
［図54］

［図55］

先ほど空気の流れの話をしましたが、実際にこういうシュミレーションをしています。これは光の取得について、なるべく自然光だけで下まで明るくしようということで、解析をしながら、いろいろなサイズを決めていきました［図56］。あとは風の方向ですね。風がどういうふうに流れるかという解析をして、かたちを決めていきました［図57］。



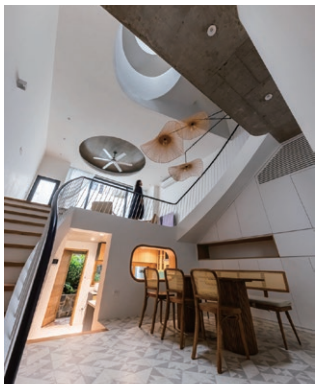
［図56］



［図57］

1階から見るとこういうかたちで、上にらせん階段が上がっているのが見えると思うのですが、大きな踊り場がぐるりと続いているようなかたちで設計しています［図58］。リビングから学習ルームにかけて、こういったらせん階段をつくっています［図59］。木製の原始的な足場が組まれて、この仮設自体がすごくきれいだったので、写真を撮りました［図60］。このらせん階段は、屋上まで続いていきます［図61］。屋上は屋上緑化をしたり、夏に向けて、開放的な開口を設けたりしています。外から見るとこのようなかたちで、バタフライルーフにして、風が強くなるようにしています［図62］。

この写真は、路地の向かいの家の2階から撮りました。ちょうど向かいがキッチンなのですが、家の中から撮っています。中といっても、ほとんど外部に近いですが。設計した家のファサードは、ほぼ、この向かいの家の壁でもあると考えて、ではどういうファサードがいいのかということで、向かいの家に対してデザインをしました［図63］。この家はちょうど家主、われわれのクライアントのおばさんに当たる方の家で、関係をよくしたいということで、通常であれば、ファサードというとエクステリアになるのですが、こういう路地の空間になると、隣の家のインテリアにもなるという趣旨で設計しています。



［図58］ ©大木宏之

［図59］ ©大木宏之

［図60］

［図61］ ©大木宏之

［図62］ ©大木宏之

［図63］ ©大木宏之

1960年代以降の団地

次にKhu Tap The、日本語で言うと団地のことですが、1960年代以降の社会主義住宅についてお話しします。その頃、日本でも団地が建ち始めるのですが、ベトナムは社会主義の国なので、主にソ連や北朝鮮、東ドイツの支援を受けて、団地がつくられていきます。

先ほど旧市街で、土地を恩賞としていろいろな方にどんどん渡していくという話がありましたが、もう渡す家がないという状況になり、住宅政策がすごく大事な課題になりました。ベトナムの団地、Khu Tap Theは、例えば建設省の役人が住む団地、金融省の役人が住む団地というふうに、基本的には役人のお給料としてつくられたものです。ですから、元々は一つの団地に同じ省庁の人しか住んでいなかったのですが、最近は経済開放されて、売り買いできるようになったので、状況が変わってきています。

これはキムリエン団地という、ハノイの南部のほうにある団地です［図64］。昔でいうと、旧市街からすごく離れた田舎にあったのですが、今はハノイ市自体が拡張しているので、すごくいい場所になっていて、ここに住みたいと、少しずつ人気も出てきています。外壁に貼り付いているフェンスは、タイガーケージ、トラの檻（おり）と呼ばれているのですが、自分たちで住空間をよくしようと思って、どんどん拡張していくのですね。この拡張部分をつくる専門の大工さんがいて、彼らがこういうものをつくっています。元々、みんな無許可でやっていたのですが、今は昔ほど許可が下りなくなってきています。しかし、今でも少しずつ増殖し続けています。外から見るとこのような感じです［図65］。

［図64］

［図65］

先ほどお見せした旧市街は、ものすごく高密度な、細い路地の中にある住宅ですが、こちらは元々、団地なので、中庭があります。都心にありながら、中庭があって、住棟間隔も広くて、今となっては、住環境的にも、ハノイで数少ない良好な場所になっています。今、集合住宅というと、都心からはすごく遠くて、ハノイから車で1時間から1時間半弱ぐらいのところにたくさん開発はされていますが、都心にあるという点で、今、団地が見直されてきています。

これは屋上が見えていますが、プレキャストコンクリート造の組み立て式が多いです[図66]。当時、まだハノイに工場がなかったので、ソ連などからプレキャストコンクリートを運んできて、ハノイで組み立てていました。ここでも早速、外にいろいろなものが飛び出していますね[図67]。寝室にこういったものを付けたり、これは最上階に床を足して、トップライトを自分たちでつくって、改造して住んでいます[図68]。

こういった少し高層のタイプもあるのですが[図69]、見ていて、ちょっとひやひやします。中に入れば、ちゃんとしているのかなというふうにも思うのですが、実際、中に入ると、本当に足元がふわふわする感じで、ちょっと不安を覚えるところもあります。でも当時、30平米の部屋に家族で住むというところから始まって、どんどん家族が増えていって、自分たちの空間を確保する欲求や要望が、そのまま素直なかたちとなってつくられている、ハノイのすごく特徴的な集合住宅ですね。

［図66］ ©大木宏之

［図67］ ©大木宏之

［図68］ ©大木宏之

［図69］

これが建設当時の写真です[図70]。ザンボー団地というところですが、コンクリート板がソ連から運ばれてきて、ハノイで組み立てられているときの様子です。当時、周りには何もないですが、今は都心部になって、周りに住宅がひしめいて建っています。完成すると、このような感じです[図71]。先ほどお見せした、いろいろなタイガーケージが付いた建物の元の姿はこういう感じです。こちら側がバルコニーになっていますが、片廊下のものが多いです。やはり、都心部のよい場所にあるので、これは数少ない建て替えが成された例です[図72]。こういう計画も進んでいるのですが、長く住んでいる方もいるので、なかなか進まないような状況です。

中はこのような感じです。彼は日本人で、トロント大学の文化人類学の研究者です[図73]。団地の研究をしていて、子どもを連れてここに住むということで、改装計画を少し手伝って、このキッチンを一緒にデザインしてつくったりしました。ちなみにこのキッチンは、先ほどの旧市街のHang Thiec通りにある工房でつくってもらったものです。こういったものを実際に使うというのが、ハノイではよく見られます。30平米、本当に小さい部屋ですね[図74]。このキッチンの細長いところの奥に見えるのがトイレなのですが、ここに水回りが集約されていて、そのすぐ隣にこの部屋があります。彼らはここに3人で住んでいたのですが、他の部屋は、今でも6人から8人ぐらいで住んでいるので、それを拡張するというのも、分かる気がします。

［図70］

［図71］

［図72］

［図73］

［図74］

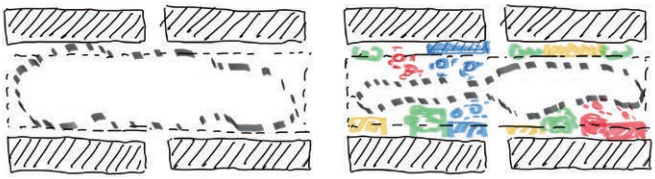
中庭：パブリックスペース

先ほど少し中庭の話をしましたが、中庭はパブリックスペースとして設定されています。ただ、使われ方が日本とはずいぶん違っていて、これは所有の概念の違いからくるのではないかと思っています。先ほどお話しした、旧市街の住宅の前、店先の路地と境界線との兼ね合いや、その使い方とも共通しています。日本の場合は、パブリックスペースというのは、みんなで平等に共有するという考え方だと思うのですが、ハノイやホーチミンでも、元はそうだったのかもしれませんが、今はどんどん私有化していく傾向にあります。

これについて一度、ベトナムの方と先ほどの文化人類学者の方と、一緒に絵を描きながら、ベトナム人は何を考えているかということを話し合ったときのスケッチです［図75］。日本の場合、団地に挟まれた中庭のパブリックスペースがあると、この面をみんなで共有するので、誰も何も置かないし、置いてはいけないことになっています。そういう話をすると、ベトナムの場合は、先ほどの旧市街と一緒で、家の前はとりあえずこの家の人が何かを出して、一体的に使うと。この隣同士はけんかにならないのかと聞くと、けんかになると言われます。実際、住みにくくないかと聞くと、住みにくいかというか、そういうものだと捉えていると。例えば昨日、植木を置いている家があったら、朝になると、こちら側に少し動いていたり、そういうものを少しずつ調整しながら生きていくのだと。それで、残った部分を、何となくパブリックスペースとして使う。しかも、このパブリックスペースも、例えばここにカフェを営んでいる人がいると、お昼は彼らがここにテーブルを出すと。それに文句は言わないけれど、夕方になると子どもたちが遊ぶので、それは仕舞ってくださいと。そのような感じで、住民たちのコミットによって、どんどん姿を変えていくのですね。

同じ広場でも、夕方になると、子どもが遊んでいるのですが［図76］、朝になると、おばさんが来て市場を広げています［図77］。この写真の端に映っているのは、元々、家に属しているテーブルの部分ですが、コンバーチブルというか、時間帯によって使い方がどんどん変わっていく、または隣の人との折衝によって変えていくということが行われています。

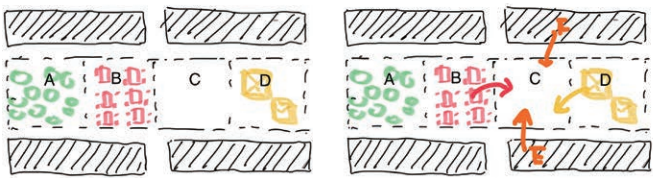
もう一つ、これは例え話でお話ししたいのですが［図78］、日本の場合、このパブリックスペースを4分割して、4人の方に使っていただきますということになったら、恐らくその通りに、Aの人はここを庭にして、Bの人はお店にして、Dの人も何か建物を建てて、Cの人は何も使わないということになったら、恐らく日本の場合は、Cの部分はずっと空き地になっていると思います。ベトナムの場合、もしCのような部分ができたら、Bの人やDの人が拡張してくる、あるいは他のE、Fの人が新たにそこを使い始めるということになると。そして、このCの部分は、日本だと空いているのはいいけれど、どんどん廃れていくというか、荒れ放題になっていくのではないかと。でもたぶん、荒れてもそのまま放置されると思うのです。それであれば、自分たちで積極的にここを使っていこうというのが、ベトナムのハノイの人たちの考え方です。外で暮らしているからこそ、こういう概念になっているのか、それとも、こういう概念だから、外をどんどん自分たちの領域にしていくのか。このときのベトナム人との会話では、そういう話になりました。では、どちらがいいのかというと、非常に難しいところではあるのですが。ベトナムに住んでいると、ダイナミックに変わっていく中庭の使い方を、言語化、制度化するにはすごく難しいのですが、日本でも空間を計画するときの参考になるのではないかということを考えながら、ハノイでの日々を過ごしています。どうもありがとうございました。



［図75］　左：日本の場合 右：ベトナムの場合

［図76］

［図77］



［図78］　左：日本の場合 右：ベトナムの場合

DISCUSSION

秋山晃士（神奈川大学建築学部特別助手）
石田敏明（神奈川大学工学研究所客員教授）
柏原沙織（神奈川大学建築学部特別助教）
曽我部昌史（神奈川大学建築学部教授）
山家京子（神奈川大学建築学部教授）
吉岡寛之（神奈川大学建築学研究所特別研究員）

柏原　ありがとうございました。ハノイに住みながら、お仕事もされている方ならではのお話を伺えて、とても楽しく拝聴しました。

これから質疑に入ろうと思います。会場の方も、オンラインでご参加の方も、どなたでもご質問のある方は手を挙げて、お話しいただければと思いますが、いかがでしょうか。

では、はじめに私から伺いたいことがあるのですが、先ほどのパブリックスペースの使い方のお話に関して、本当に私有化をいとわないというか、なぜかどんどんそうなってしまうという状況がすごく面白いなと思って見ていました。

今、私が共同研究に参画している中で、都市型水害が商業活動にどのような影響を与えるのかというテーマで、旧市街の調査をしました。そのときに、道端にたくさん出ているものを日常的に片付けるのか、水害が起こりそうになったときにいつ片付けたのかといったことも聞いたのですが、やはり大体みんな、道に出しているけれど、毎日片付けるという回答が多かったです。

ベトナムの場合、はみ出していくような傾向が見られる中で、一時的に占有はするけれど、半永久的に占有はしないとか、何かそういうさじ加減みたいなところがあるのかなと思って聞いていました。空間を使っているときに、「これぐらいならオッケー」といった感覚的なところなど、現地で暮らしている中で気付いたことがありましたら、伺いたいです。

竹森　ありがとうございます。まず、パブリックの考え方がスタートの時点で少し違うということがあります。ベトナムは社会主義国なので、全てがパブリックなはずという前提から始まっていて、自分が住んでいる土地も、基本的にはパブリックです。要するに私有地というものは、本来は一つもないはずだというところから考えると、少し分かりやすいかもしれません。つまり元々、境界線がないのですよね。

日本の場合、私有地と公有地の境界線が元々あるので、ここは公有、ここは私有、私有は自分のもの、公有はみんなのものとなるのですが、ベトナムの場合、全部みんなのものというところから始まっているのが、彼らの考え方としてはすごく大きいのかなと思っています。その中で、境界線がない、どこまで私有なのかというのは、他人との関係性でしかないのですよね。

夜になると物を片付けているというのは、どこまで占有していいかとはまた別の問題で、盗まれてしまうからだと思います。単純に物が持っていかれてしまうので、家の中にしまいます。

いずれにしても、境界線が引かれるのではなく、相対的な距離で、物事が決まっていきます。先ほどの中庭の図［図75］もそうですが、青、赤、緑、黄色がどんどん流動的に動いていくのは、相対的な距離で決まっていきます。面倒なことも多いようですが、それで自分たちの暮らしを確保していく。明確な境界線が引かれていない中で、自分たちで線を引くということが、外で暮らすことのスタートになっていると考えています。

柏原　ありがとうございます。そうか、境界がないのだと、すごく納得しました。

今、東京大学の蕭耕偉郎（しょう）先生から、チャットでご発言がありました。「ハノイには何度か伺いましたが、本日の発表をお聞きして、自分の空間体験が理論化・言語化されて、改めて理解することができました。お先に失礼させていただきます」というごあいさつがありました。ありがとうございます。

竹森　どうもありがとうございます。ハノイにいらっしゃるときにはお声掛けください。

柏原　蕭先生は、今、私も別の共同研究でご一緒させていただいている方で、本日のレクチャーにもお声掛けさせていただきました。他の方々から、もしご質問がありましたら、お願いします。

山家　大変興味深いお話をありがとうございました。ぜひハノイに行ってみたくなりました。質問ですが、ちょうど2年前、アジア研究センターの共同研究「アジアの社会遺産と地域再生手法」のレクチャーシリーズで、モンゴルのお話をしていただく機会がありました。モンゴルにもソ連の設計者が設計した社会主義住宅があって、モンゴル人の住まい方に合わせてカスタマイズされて住まわれているというお話がありました。ベトナムの場合も、同じような状況が見られるのか、もしあるとしたら、それはどのようなカスタマイズなのか、教えていただければと思います。

竹森　ありがとうございます。元々、PC※3のパネルで造られている建物なので、すごく開口部が限定されています。それに関して言うと、ソ連のように寒い国、あるいは乾燥している地域であればいいのですが、ハノイの場合は、やはり室内の湿気がすごいです。それで、こういうバルコニーやタイガーケージを設けて、内部化する場合もあれ

ば、外部化する場合もあるのですが、開口部を大きくして、通風のよい部屋を増やしていくというのが、現地でのカスタマイズの一つでもあります。

今、見ていただいている写真は、片廊下の廊下側です。家と廊下を挟んで、外にもう一つ空間をつくっているので、ここが半屋外空間になっています。こういうのは極めてハノイ的というか、ベトナム的なローカライズです。昔は煮炊きをほとんど外でしていて、それも10年ほど前までは割とそうだったので、キッチンをその空間に持ってきたり、もちろん洗濯物も干してあったり、ちょっとお茶を飲んだりしています。そういう夕涼み空間のような場所が外廊下側にあり、プライベートではなく、先ほどのいわゆるボーダーがない感じで出てきます。家の目の前なので、隣の家の人が通っていくわけですが、それはあまり気にせず、そういう家の使い方をするというのが、ベトナムのローカライズではないかと思います。

※3 Precast Concrete工法の略で、工場で製造したコンクリート部材を工事現場に運び入れ、現場で組み立てる、工業化された工法。

山家　ありがとうございます。

曽我部　大変興味深かったです。先ほど話題になった、境界がないということが、いろいろなかたちでつながって理解できた感じがしました。外で作業しているというのは知っていたし、外で将棋のようなゲームをやっている風景も見たことはあったのですが、それが植物の育ち方とも連動している。境界がないという公共の場所に対する意識の仕方が、団地の中にまで浸食している。あらゆるところに関係しているということが分かった感じがしました。ハノイに行くと、交差点で、両方向の道にバイクや車が通りながら、なおかつそこを歩行者がゆっくり歩いて渡っているという、何かそういうことにも関係しているのではないかと思いました。

一方、日本のことを考えると、何かしらのルールによって、無関心になっているとも言えます。つまり、どういう車が走っていようと、どういう人が歩いていようと、どういう人が住んでいようと関係なく、無関心でも成り立つような仕組みができている日本の状況に対して、ハノイでは、とりあえず関心を持ち続けないと成り立たない流動的なルールというか、何かそういう存在が支えている。そのことに気が付けたのは、大変興味深いなと思いました。

ところで、よく理解ができなかったのですが、先ほどの、幅1メートルの廊下を70〜80メートル進んでいった奥にある、4階建てのアートギャラリーを設計されていますが、あれはやはりRC（鉄筋コンクリート）造ですか。

竹森　RC造です。

曽我部　日本だと、幅1メートルの通路空間の奥に、敷地があるのですと言ったら、それだとRC造は無理ですと言われるのですが、そういった敷地でRC造の建築がどのように可能になるのかということにびっくりしました。こういう工事は割と普通にやってくれるのですか。

竹森　そうですね。アートギャラリーは旧市街に敷地がありますが、先ほどの住宅のプロジェクトの場合は、例えばコンクリートは大通りから100メートルぐらいパイプを引っ張ってきて、コンクリートを圧送して打設したり、鉄筋は写真でお見せしたように手で担いできたり、人海戦術プラスパイプなどを使ってやっています。あとは現場での手練りもありますね。

曽我部　先ほどの重力換気の家の、吹き抜け空間のところの仕上がりも、ものすごく有機的な形状の組み合わせでできていて、このような一筋縄でいかないものを、よくやるなと思いました。

竹森　そうですね。コンクリートの文化が長いので、比較的、手で造形していく能力は高いというところを利用しています。ですから、すごく計算してつくっているというよりは、模型を精緻につくって、それを現場に置いて、模型を見ながら、職人さんたちが型枠を組み立てていくというやり方をしています。

曽我部　では、図面はないともいえるのですね。

竹森　もちろん、図面は描いています。3Dもつくっているのですが、彼らが読めないので、最終的には部分模型をつくって、現場でそれを見ながら、一緒につくっています。

ちなみにこの敷地でいうと、スパンが大きかったので、鉄骨造のほうがすごく理にかなっているのですが、逆に鉄骨だと長物が入らないので、運べないのです。ですから、細かくして砂袋で持っていけたり、圧送できるRC造のほうが可能性があると考えました。

吉岡　コンクリートはポンプ圧送しているのでしょうか？それとも現場で手練りでしょうか？

竹森　通りにコンクリート車を置いて、圧送しています。アートギャラリーの場合は、道路から敷地まで70〜80メートルでしたが、住宅の場合はもっと長くて、200メートルぐらい、パイプをずーっとつないでいました。だから、コンクリートを打つのは大体、夜中の12時です。車を路地に停めないといけないので、職人さんたちが今コンクリートを打っているので、と言って、待ってもらいます。それで、近所に知らせて、この時間は通れませんと言って、交通規制をします。それで、200

メートルぐらい圧送します。だから、夜中に現場監理に行かなければいけないのですね。そういう意味でいうと、大変ですけれども。

吉岡　話は変わりますが、竹森さんが紹介してくれた写真を見ると、結構、路上がきれいだなと感じたのですが、誰かが清掃されているのでしょうか？

竹森　実際は、写真ほどきれいではないですが、掃除は店の人がやるか、URENCOという都市環境公社があって、そこで働くおばさんたちが、ほうきとをごみを集めるごみ収集のカートを持って、回っています。市民の人たちは、家先や店先にごみ袋を置くと、そこをカートが通って、どんどん集めていくという仕組みになっています。

吉岡　路上を使った人も、ごみ袋に入れて、そこに置いておけば、収集してもらって、ごみが消えていくという仕組みでしょうか。

竹森　なかなかそういう行儀のよい人はいなくて、みんな、ポイ捨てしてしまうのですが、何となくきれいになっていくというか、でも実際はそれほどきれいではないです。

吉岡　なぜそのようなことを聞いたかというと、路上などの外部空間をみんなで使いこなしていく際に、清掃された状況をどのように持続されているのだろうか、という点に興味がありました。

竹森　お店をやっていると、やはり商業的に掃除をするので、その周辺はある程度、きれいになっていきますし、先ほども言ったように、ごみ収集の人がほうきを持って掃除してくれたりもします。ただ、境界線がないからということを逆手にとって、別に自分で掃除をしなければいけないという感じにはなっていないです。境界線がないことが、そういう、よい方向には働いてなくて、どちらかというと、悪いほうに働いています。

秋山　外部空間へと拡張している感じがあるベトナムの文化の中で、もし新築で、例えば集合住宅を建てるということがあった場合に、そういった拡張を予測して計画をつくっていくのでしょうか。あるいは、集合住宅をつくるときには、パブリックスペースについては、どういう考え方があるのでしょうか。

竹森　最近、郊外のほうに集合住宅がたくさんつくられているのですが、そういったパブリックスペースをつくっている事例はあまり見たことがありません。

　数年前に、ランソン省というベトナムの北部の省庁舎のコンペに参加したことがあって、われわれはその提案の中で、要求はなかったのですが、市民が使えるパブリックスペースをつくったほうがいいのではないかと提案しました。ところが、その役所の方からは、いや、そんなものは市民が集まって、自分たちで勝手に見つけて、路上でやるから、わざわざつくる必要はない、という回答がありました。コンペでは1等を獲ったのですが、まだ建つかどうか分からなくて、もし実現するのであれば、みんなが勝手にやるから、パブリックスペースはなくしていいと言われているので、集合住宅でも同じような話で、それはつくられないのではないかなと思います。

秋山　ハノイのまちは、すごくたくましく、楽しく経済発展もしていて、こういう今の面白い、豊かな姿がなくならないで、ずっと続いてくといいなと思います。

竹森　私もそう思います。でもおっしゃるとおりで、今はやはり過渡期にあると思います。コミュニティがあるからこそ、人とのつながりがあるからこそ、こういうものが成立しています。曽我部先生がおっしゃったように、意識するからこそ、成立しているものなので、日本のように、無意識の中で生きられるようになっていて、それは便利なことでもありますが、ベトナムも少しずつ、そのような状況になりつつあるのではないかと感じています。引っ越したりすると、地域とのコミュニティは切れてしまうので、だんだん、つながりがなくても、社会が成立するようにしなければいけなくなってくるのですよね。そうすると、日本がかつてそうであったように、ベトナムでも、もう少し先になると、コミュニティスペースをつくろうということになるのではないかと予想しています。辻々にみんなが集まっていた頃が、日本にもきっとあったのだと思うのですが、計画概念として、コミュニティスペースとかパブリックスペースとか言い始めたのは、比較的最近なのではないかと思っています。それは、アジアの建築という一番最初の話に戻ると、やはりアジアは、元々、道の中にそういうコミュニティスペースが内蔵されていて、西洋では、教会前の広場がコミュニティスペースだということを、大学の都市計画学で習うと思うのですが、まさにそれを体感しています。初めてベトナムに行ったときに、まず感じたことが、今思うとそれなのだと思うのですよね。建物を個体、個体で考えるのではなく、まちの総体として、アジア的な暮らしをずっと続けられていた場所で、そこに自分が引っ掛かったのだなというのが、最近思うところであります。

柏原　アートギャラリーを設計された土地のことを伺いたいなと思います。ここは家と学校の隙間だったというお話でしたが、アートギャラリーを建てるために、誰がどのように土地を確保できたのか、誰のものとして利用権を得られたのかというところが気になりました。

竹森　アートギャラリーをつくる以前、そこは駐輪場として使われていて、バラックのような屋根が架かっていて、先ほどお見せした家の住人の1人が持っていました。このアートギャラリーは、結構、伝統のあるハノイのアートギャラリーなのですが、音楽もやっていて、音楽の録音室がこの1階にあったのですね。その土地を誰が持っているのかを知って、そこを買って、ギャラリーをこちら側に移転させようという計画で、移転してきています。

この建物には、権利図のようなものがあって、この中に3者が住んでいます。2階と3階にそれぞれ人が住んでいて、1階がこのお店とアートギャラリーのものだったのですが、この長い70〜80メートルの廊下は、共有スペースとして、権利としては案分されています。意外にも、そういうことがきちんと行われています。ただ、全てのビルでそれが行われているわけではないようです。中には、謎の空間のような、変な中二階もあったりします。

石田　いろいろと美しい写真を見せていただき、ありがとうございました。私は5年ほど前に、学生を連れてホーチミンに行ったことがあるのですが、そのときに、路地空間に新築の住宅が建っていて、その建ち方として、やはり空気の通風を考えて、穴開きブロックの種類がかなりたくさんあり、それをファサードに使って、デザイン的にも美しい建築ができていました。ハノイでも、そういう建材は結構あるのでしょうか。あまり全体的には見られないように感じられたのですが。

竹森　ありがとうございます。ハノイにも同じように、穴開きブロックはあります。ホーチミンのほうでは、佐貫大輔さんという日本人の建築家の方が、大々的にそれを使って、集合住宅をつくっています。種類としては、押し出しでつくって、輪切りにしていくテラコッタブロックというものと、コンクリートの型枠に入れてつくるタイプのものがあって、南部は元々、テラコッタが多いですね。北部はコンクリートのものが多いですが、今は南北ともに、そういうものがたくさんあります。

私が設計した住宅で、穴開きブロックを使っていない理由は、最近あまりにもそういうものを使う住宅が多いので、ちょっと別のパターンをつくってみたいと思って、普通のブリックで組み合わせを考えて、通風とプライバシーをどう確保できるかというスタディーで、こういうものをつくっています。

お見せした写真に映っていないのは、たまたま、あまり映っていないだけで、ハノイにもそういうものは結構あります。

石田　ありがとうございます。それともう一点、お聞きしたいことがあります。ベトナムというと、非常に緑が多いイメージがある一方で、実際のパーセンテージとしては比較的少ないと聞いたことがあるのですが、緑を増やしていくといった国の政策は、何かあるのでしょうか。

竹森　一時期、建築家の方で、そのように言っている方がいらっしゃったのですが、公園面積とかそういうもので換算すると、もしかするとパーセンテージは低いのかもしれないですが、街路樹がものすごく大きくて、30〜40メートルほどの高さの木がたくさん並んでいたり、あと元々のローカルな方たちの暮らしの中で、ファサードにたくさん植木鉢を並べたり、植木鉢が家の中にビルトインされて、大きな木を育てているおうちもあるので、体感としては、緑がとても豊かな場所だと思います。そして、亜熱帯気候なので、繁茂しやすいというか、特に夏はかなり大きな体積まで木々が育つので、決して緑が足りないような場所ではないというふうに思います。

石田　ありがとうございました。

曽我部　今のお話に関連したことですが、旧市街のブロックが、道路から中心まで80メートルほどあると言われていました。そうするとブロックの一辺は150メートルほどの長さがあるということですよね。その150メートル角の中には、ほとんど空地がなくて、そこに木が生えたとしても、微々たるものだと思います。だから面積で計算すると、やはりパーセンテージは低くなっているのかもしれないですね。

竹森　そうですね。面積としては少ないのかもしれませんが、立体的に考えると、緑は壁にたくさん付いていたりするので、体感としては、あまり少ないという感じはしないです。

曽我部　日本でこういう都市の成り立ちの話を聞いていると、大体、どこかで大地震や空襲、大火が起こって、都市自体のつくり直しになることが多いですが、ハノイでは、そういうことは一度もなかったのですか。

竹森　いえ、戦災はありました。近代でいうと、アメリカとの戦争のときに空襲を受けているのですが、旧市街では、そういう被害はあまり聞かないですね。今日、スライドではお見せしませんでしたが、例えば旧市街から1キロも行かない南のところに、ハノイ駅があります。そこは元々、120メートルほどの両翼がある、フレンチコロニアル様式の建物だったのですが、軍事にも使われる場所なので、そのど真ん中を爆撃されています。それで、真ん中の部分は壊されたのですが、両翼はそのまま保存されて、真ん中の部分だけがソ連の様式の建物になって、そのまま使われていたりします。

あと先ほどお見せしたLong Bien Bridgeは、真ん中のほうは爆撃されて、失われています。それを無理やりつなげて使っています。ですから、戦災は結構受けています。

ただ、その戦争のとき、最初のほうの地図にあるように、中心部以

外は、建物が少なかったのですよね。なので、被害もそれほどでもなかったというところはあるかもしれません。

柏原　時間も押し迫ってまいりましたので、本日はこの辺りで締めさせていただきたいと思います。改めて竹森さん、今日は貴重なお話をどうもありがとうございました。

竹森　どうもありがとうございました。

柏原　以上で終了させていただきます。オンラインでご参加いただいた皆さまも、本日はどうもありがとうございました。

神奈川大学アジア研究センター共同研究
「アジア都市の生活圏」レクチャーシリーズ

Vol.1

Touristification, gentrification, pandemic, and living heritage
–Recent urban transformation at a World Heritage Site and a non-UNESCO historic site

講師：Khoo Suet Leng（ペナン マレーシア科学大学 准教授）
柏原沙織（神奈川大学建築学部・特別助教）
日時：2024年5月22日

Vol.2

ハノイ都市部の生活圏

講師：竹森紘臣（Worklounge 03-Vietnam 代表取締役）
日時：2025年1月28日

発行　神奈川大学アジア研究センター
〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1　電話：045-481-5661

デザイン　丸山智也、野中優衣（マルヤマデザイン）
編集　吉岡きくみ
2025年6月30日発行

©Kanagawa University Center for Asian Studies 2025